

健康
コラム名医が語るお母さんへの手紙
溶連菌感染症

お子さんが突然の高熱と喉の痛みを訴え、さらに発疹が出てくると「これは風邪？それとも他の病気？」と戸惑うことがあるかもしれません。今月号では「溶連菌感染症」について考えてみましょう。

溶連菌感染症の原因は、ウィルスではなく「A群β溶血性連鎖球菌（A群溶連菌）」という細菌です。通常溶連菌感染症と呼ばれるのは咽頭炎のことを指し、主に飛沫（咳やくしゃみなど）によって広がります。3～15歳の小児に多く集団生活の場で流行することがあります。潜伏期間は2～5日で年間を通してみられますが、冬から春にかけてピークがあります。

典型的な症状は突然の高熱、強い咽頭痛、そして発疹（紅斑）で、鼻水や咳などが見られないのが特徴です。発熱と喉の痛みで始まり、1～2日遅れて体に発疹が出て

きます。発疹は溶連菌の毒素によるもので、頬・わきの下・太ももの内側（ちようどパンツが当たる部分）から全身に広がっていきます。特徴的な所見として、舌が赤くブツブツとした「イチゴ舌」（発症3～4日目）が見られ、回復期には手足の皮がむけたりすることもあります。特徴的な症状からある程度診断可能ですが、腎炎やリウマチ熱合併症を考えると確定診断が必要です。疑わしい場合は、喉から採取した検体を迅速検査キットで検査します。



適切な抗菌薬（抗生物質）を使用すれば、溶連菌感染症自体は比較的短期間で治癒します。しかし適切に治療を受けなかった場合には、中耳炎、副鼻腔炎などがみ

られることがあります。溶連菌感染症で最も重要なことは、発熱後2～3週間で起こる腎炎（急性糸球体腎炎）やリウマチ熱などの合併症です。これらは心臓や腎臓にダメージを与え、一生にわたって影響することもある重い病気です。腎炎を早期に見つけることを目的に、当院では2、4週間目に尿検査（血尿、蛋白尿）を行っています。この尿検査に関しては医療機関で対応が異なります。検査しなくても感染後は尿の色を気にしてあげましょう。

注意し、爪を短く切っておくことが予防につながります。さらに、同じくA群溶連菌による病気として「猩紅熱（しょうこうねつ）」もあります。これは高熱、咽頭炎、そして全身に広がる鮮紅色の発疹を伴う病気です。昔は法定伝染病に指定されていましたが、現在では溶連菌感染症として扱われ早期に治療を行えば、重症化することはありません。今回は触れませんが小児では稀な「人食いバクテリア」とも呼ばれる劇症型溶血性レンサ球菌感染症も同じ菌による重症な感染症です。

合併症を予防するためには、抗菌薬を最後までしっかりと飲み切る（通常10～14日間）ことがとても大切です。症状が治まったからといって途中で止めてしまうと、菌が体内に残り、合併症を引き起こすリスクが高まります。溶連菌は皮膚にも感染し、夏に多く見られる「伝染性膿痂疹（とびひ）」の原因となります。これは、虫刺されや湿疹のひっかき傷から菌が侵入し、水ぶくれやかさぶたが広がっていく病気です。皮膚を清潔に保ち、傷をつけないように

登園・登校に関しては、抗菌薬を服用し始めて24時間以上経過し、発熱が下がり、体調が良ければ可とされています。溶連菌は身近な細菌ですが、侮れない面もあります。治療によく反応しますが、合併症を考えると重要な病気です。溶連菌感染を疑われる症状が出たら、早めに小児科を受診しましょう。診断がついたら、医師の指示を守って薬を飲み続けることが何より大切です。



小児科専門医 川村 和久

仙台市在住。医療法人社団かわむらこどもクリニック（仙台市）院長。日本一の小児科サイトを運営。「お母さんの不安・心配の解消」を営業理念として、様々な子育て支援活動に取り組んでいる。宮城県小児科医会副会長、日本外来小児科学会理事。
<http://www.kodomo-clinic.or.jp>



▲ Facebook



▲ LINE